

抽象的人間労働の研究Ⅷ

Ⅷ 抽象的人間労働Ⅸ 概念規定をめぐる係争史

* 日山 紀彦

われわれは、これまで、『資本論』の研究史上において見過ごすことのできない重大な理論上のアポリア、すなわち『資本論』における〈抽象的人間労働〉の概念規定の対立・矛盾する二義性ないしは齟齬を概観してきた。これは、多くの論者達によってさまざまな形で直接・間接に論じられてきた問題の一つであった。われわれは、これを独自の問題意識に定位して、われわれにとつての問題そのもののありかをより簡潔かつ鮮明に浮き彫りにするべく、これまでの係争史をある視点から整理していくことにしたい。その際、ここでわれわれのいう独自の問題意識あるいは視点というのは、この概念規定の二義性は、マルクスの不注意あるいは混乱に由来するものではなくて、『資本論』の弁証法的な上向法的叙述において統合・統一されていく概念として、戦略的に配慮された二義的規定であるというそれである。もしこの前提的想定が完全に論拠づけられないとしたら、マルクス「価値論」は重大な危機に直面し、その今日的な理論上の意味はおろか彼の「経済学批判」も体系としては理論的整合性・正当性をもたないとみなさざるを得ないのではないかと思われる。この課題こそが、ある意味では、

本稿の全体において遂行される隠れたテーマの一つといってもよい。そこで、われわれとしては、上述したようにこれまでの件の概念規定をめぐる係争史を単に概観・紹介するのではなく、われわれ独自の問題構制からこの係争史を整理するとともに、同時に、さらに積極的にわれわれにとつての問題のありかを初次的準位ではあつても提起しておくことにしたいと思う。そのため、係争史の整理・類型化にあたっては、さしあたり〈抽象的人間労働〉とはそもそも「特殊歴史のカテゴリー」なのかそれとも「超歴史のカテゴリー」なのかという周知の論点を視軸として採用して、ポイントとなるいくつかの論争を取り上げながら論議を展開していくことにしたい。同時に、われわれはそこに提起されたいくつかの問題点を、われわれの問題構制に還元しながら積極的に登記しておき、次章以下の論旨の展開全体のなかで逐次これらと対質していくことにしたい。

A. 戦前における論争

マルクスの「労働価値説」に対する外部からの最初の本格的な論難の口火を切ったのは、いうまでもなくベーム・バヴェルクであった。彼の『資本論』批判の基本視角は、その後のマルクス批判の諸潮流のなかで一つの原型・典型となるものである。この批判に直ちに反駁したのがヒルファードイニングであった。これが、いわゆる「ベームvsヒルファードイニング」論争として知られるものである。

ベームの『資本論』批判は多岐に渡り、ほぼその全域に渡るといってもよいが、ここでは〈抽象的人間労働〉にかかわるものだけに限定することにしたい。とはいえ、ベームにはかならずしもマルクスの〈抽象的人間労働〉概念規定に対する立ち入った直接的な批判がみられるというわけではない。ベームは、まず商品の価値を「もっぱらそこに体化されている労働量だけに基づいている」とするマルクス価値論の根本命題に対し、商品を「労働生産物だけに局限する」マルクスの視座を批判するとともに、価値は稀少性や功用や需給等の「経験やその作用する動機から経験的にまたは心理学的に根拠づける」べきであったという。マルクスが行ったのは、そうした科学的な手続においてではなく、純粹に思弁的な方法すなわち「交換の本質から純粹に論理的な証明——弁証法的な演繹——をするやり方」^①に依拠した商品の価値の実体の導出であるとした上で、ベームは「もとめられた『共通なもの』として労働をマルクスが蒸留してとりだす論理的な方法的操作」の恣意性を具体例をあげて批判し、蒸留法的「労働価値説」の論証手続きを「マルクスの理論の最大の弱点」と論難する^②。

われわれとしては、商品および価値ひいては商品社会のトータルで

統一的な把握においては、なぜ「労働とその社会的関連」が中核をなさねばならないかを唯物史観の世界観的地平において討究しておいたが、ここではそれをベームへの反論として持ち出すことは措くことにして、ただ単にベームのマルクス批判を記述するだけにしたい。われわれが、ここで取り上げておきたいのは、〈抽象的人間労働〉論において重要なのは「使用価値の捨象」に関するベームの批判である。彼は、マルクスがやったように諸々の特殊な使用価値を捨象すれば価値が導出されることにはならないとして次のようにいう。「諸商品の交換関係にとつても……これらの商品が現象するであろう特殊な様相は、なるほど捨象されるけれども、しかし使用価値一般はけっして捨象されはしない」^③。これは確かである。では、「使用価値一般」と「価値」とはどう違うのか。

ベームがいうように、諸商品の多様な使用価値の悟性的捨象は、「使用価値一般」という「共通なもの」を導き出すとすれば、これを「労働」に係わらせていえば、諸使用価値を生産する諸具体的有用労働の同様の捨象は「具体的有用労働一般」を抽出するといえはすむ。だから、マルクスのようにわざわざこれを「抽象的人間労働」と形而上学化して表現する必要はないというわけである。問われるべきは、先の「使用価値一般」と「価値」との違いに相即して、「具体的有用労働一般」と「抽象的人間労働」とはどう違うのかという問題である。また「捨象」ないしは「抽象」の意味である。われわれはこれにどう答えるのか。ここでは第一の問題登記としてこれを掲げておくに留める。

ベーム・バヴェルクのマルクス批判のなかで、われわれの関心からいって特記しておかなければならないのは、何といっても件の第一巻

と第三巻の矛盾に関する批判である。このベームの周知の批判とは、第一巻の冒頭商品論の価値論においては、商品の交換は等労働交換として投下労働量によって価値の実体的規定が与えられているが、第三巻の水準では商品交換はこの価値法則によってではなく生産価格に規定されるものと修正されており、資本制商品社会では価値法則は否定もしくは修正されているのではないかという批判である。ということ、価値に体化される労働と生産価格によって表現される労働とはその概念規定の内実が一致しないということである。同じ資本制商品の交換を規制する抽象的人間労働の規定が第一巻と第三巻とでは不整合ということになり、両者の概念規定には齟齬が出てくるのではないかという批判がここから当然出てくることになる。ベームの批判の直接の矛鋒は、むしろ、第三巻では第一巻の意味での等労働交換が否定され、平均利潤にもとづく生産価格による交換が説かれており、これは価値法則の修正を意味するだけでなく、明らかに第一巻と第三巻との間には論理的な矛盾があることを示すものだという点に向けられたものである。^④ そこからベームは、マルクスのいう等しい量の価値実体（＝等しい抽象的人間労働量）に基づく商品交換を前提とした上でそれを規制する価値法則をいうのは、資本制商品には妥当しない恣意的・形而上学的なドグマだとして『資本論』の根幹を論難するのである。また、価値法則は歴史上の単純商品社会においてのみ妥当する法則だとエンゲルス流に逃げをうったとしても、事実問題としてそのような社会は歴史上存在しないと批判するのである。^⑤

この批判は、われわれにとって、深刻な問題提起をなすものである。第一巻という価値法則あるいはそこでいう価値の実体としての抽象的人間労働は、第三巻という生産価格ないしはそこに表示される労働と

どういう内的関連を有するのか、それとも全く関連はないのか。価値は生産価格の論理的基礎をなす、もしくは前者は後者の導出の理論前提であるとか、個別商品には生産価格が妥当するとしてもしかし総社会的には価値法則が妥当するとかいうのであれば、ますます余計に両者の関連の論理的基礎づけが不可避となる。

この問題は、いうまでもなく、別の形で、「転形問題」として、主として欧米のマルクス研究の主潮流の一つとして展開されてきたものである。そして、そこでは一定の問題の方向づけはみられるにせよ充全な解決はいまだみられておらず、現在進行形というより休眠中といった方が適切な係争問題の一つとなっているというのが実情であろう。ましてや、価値の実体としての抽象的人間労働と生産価格における労働との関連づけとなると殆んど手つかずの問題といってもよいであろう。これは、われわれにとっても登記しておくべき第二の問題である。

ベームの『資本論』批判に直ちに反応したのがヒルファディングであった。ヒルファディングはその反批判のなかで、使用価値の捨象は「ある物のある人間に対する個人的関係」の捨象、要するに「物の個別性における個人的な価値評価」の捨象であるとした上で、「これに反して、たとえ私が自分の労働を支出したところの具体的様式ならびに方法を捨象したとしても、労働一般がその一般的・人間的姿態において支出されたという事実には依然としてかわりはない」という。すなわち「労働一般が客観的大きさをもち、その時間的継続によって度量されるという事実にかわりはない」というのであるが、この「労働一般」と「具体的有用労働一般」とは、存在論的＝認識論的にどう違うのかははっきりしない。また、この「労働一般」は、ヒルファア

ディングの場合、明らかに〈抽象的人間労働〉をいうことになるという方がいいが、それにもかかわらず上述の規定では、このカテゴリーが歴史的なものか超歴史的なものかは微妙となってしまう。

ベームの件の第一巻と第三巻との矛盾に対する批判に対しては、ヒルファディングは、エンゲルス流に、第一巻でいう価値論は第三巻でいう生産価格論の歴史的前提をなすもので、資本制商品社会にあっては交換の規制原理は価値ではなくもっぱら生産価格によって行なわれることになるという。ヒルファディングの結論は、「資本所有者の平等性を表現するところの交換は、労働支出の平等性を基礎とする交換とはもちろん異なるものとして規定されている」ということである。そこから、価値論は歴史的な単純商品社会において妥当し、生産価格論は資本制商品社会において妥当する、というわけだ。価値法則が、普遍的な商品交換がまだ社会の全体を支配していない歴史段階で成立しうるものか、あるいは歴史的に単純商品社会なるものが実在したかどうかの問題性はここでは問わないとしても、先述しておいたように価値論と生産価格論とは論理的にどういう関係にあるのか、これは依然としてヒルファディングにおいても不明である。さらに、われわれにとって重大な問題は、価値の実体としての抽象的人間労働は生産価格においてはどうなっているのかという問題である。同一の概念規定と内容において貫徹しているのか、それとも修正・変容されたものとして現われているのか、あるいはまたそもそも抽象的人間労働なるものはそこで全く放棄されなければならないのか、これらはヒルファディングにおいても解決されていない。われわれとしては、この未決の係争問題もまたここでは登記するに留めておきたい。

ところで、「ベームvsヒルファディング」論争は、殆んど直輸入の形で丸写しに戦前の日本で再生産された。「小泉・高田・土方」陣営とマルクス派（山川・河上・櫛田・舞出・向坂等）との論争である。われわれからみて、抽象的人間労働論をめぐってあらためてここでとり上げるべき新しい論点はみられない。ただ「櫛田vs河上」論争においては〈抽象的人間労働〉の歴史性に関して重要な展開がみられるので、これを簡単にみておくことにしたい。

両者の論争は、上述のマルクス批判派とマルクス擁護派の論争から派生したいわばマルクス派内部の内ゲバ的論争の様相を示すものであったが、ここで重要なのは、両者が微妙な差異を残しつつも、「抽象的人間労働」≡歴史カテゴリー説を打ち出していることである。とはいえ、「両者とりわけ河上は、『資本論』冒頭章の第一節と第二節における社会的実体説と生理学説（自然主義的実体説）との齟齬を充全に対自化しながら、その統一を志向していたわけではないように思われる。他方、櫛田の場合は、今日からみてもきわめて独自の重要な見解を打ち出していることは留意されてしかるべきであろう。

河上肇は、この論争においていくつかの点で自己批判と自説の修正を図りつつも、抽象的人間労働——河上の場合、独自の見地からこれを「捨象的な人間労働」と訳す——を社会的実体としての特殊な「社会的労働」とみなす。つまりそれは「労働諸生産物の全面的交換という社会的過程の産物」であって、それ故「それはまた社会的な労働である」というわけである。それは、交換の社会的過程において規定され、特殊な社会関係を内包する「まったく近代的な範疇」であるともいう。⁸⁾要するに歴史的な形態の特殊な社会的労働であるということである。

もつとも河上は、マルクスの生理学説の規定の方にも目配りしながら、抽象的人間労働を同等な人間の労働力の支出としての単純労働と規定し、この労働は「商品生産の発展に伴うて始めて現^①、実^②に存在するもの」ともいつていることも確かである。この場合、「同等な人間」および「単純な労働」を歴史のカテゴリーとみなすかどうかに解釈の分れる余地はあるだろうし、また単純労働が規定・実現されるのは「生産過程」か「交換過程」かによって、河上の前者の歴史カテゴリー説に矛盾が出てくることになりかねないのではあるが、しかし、河上は先の引用文の直後に次のように明言している。「しからば、かかる換算は、どこで如何に行われるか？ それは市場における諸商品相互の交換によって」と。ということは、河上は基本的には明らかに「抽象的人間労働」＝歴史カテゴリー説に立っていると意図しているように思われる。

他方、榊田民蔵も、論旨に違いはあるものの河上よりもはるかに明確に生理学説を斥け歴史カテゴリー説を主張している。彼は、価値の实体としての抽象的人間労働とは、「歴史に超在する抽象的個人の抽象的労働ではなく、商品生産社会という特定な社会関係の下に於ける私的個人の労働が交換の作用を通して取るところの……特殊な社会的労働の一形態である」といい、この点では河上と同様にこの労働を交換過程ではじめて与えられる特殊歴史的な形態の社会的労働と明言する。榊田にいわせれば、マルクスが抽象的ないしは一般的な労働という際には、そこには確かに「物理的能力の支出としての労働の内容」をさす場合と「労働の社会的形式」をいう場合との二つの意味を読みとることができる。そして、抽象的人間労働を前者の意味で、つまり生理学的規定において理解することも可能であり、実際この意味に解

釈する傾向も強い。だがそれはマルクスの本意ではないと榊田はいう。というのは、この解釈は「スミスやリカードと異なるところが無い」ものであつて、まさにこの廉でマルクスは両者の価値に対象化される労働規定を厳しく批判しているからだ。マルクスのこのスミスとリカード批判に関しては、われわれも後に詳しく検討していくことになるはずである。

榊田は、マルクスの抽象的人間労働規定の本諦は後者の意味における規定にあるとする。この労働規定には「特殊な歴史の意味」が含意されており、この労働の抽象性は「特定の社会的形態から与えられる」社会的な無差別性（同一性・通約可能性）を表わすものであるとする。これは河上よりもはるかに鮮明に歴史カテゴリー説の立場からの主張となっており、後段においてわれわれが展開する「労働の特殊歴史的な社会的形態説」と同趣のものを意味するものとなっているいえよう。

「経済学批判体系」の理論構制にとつて「決定的な飛躍点」をなす（抽象的人間労働）論をめぐる戦前の論争において外すことのできないのは、いわゆる「ルービン vs コーン」論争と呼ばれるものである。この一九二〇年代のソ連において繰りひろげられた論争は、この労働概念をめぐる最初の本格的な論争であると同時に、ここにおいて基本的な問題点はほぼ出つくしているといつても過言ではない程である。

一九三〇年代のソ連の政治情勢のなかでスターリン体制によって異端として断罪され肅清されたルービンは、その後長い間、忘却された理論家として歴史の闇の中に葬られてきたが、一九七〇年代前後の欧米「マルクス・ルネッサンス」の潮流のなかで、再びその理論的意義が脚光をあげ、再評価され、その存在が再浮上してきた数奇な運命を

たどった理論家であった。彼の〈抽象的・人間労働〉規定を少々詳しくみていくことにしよう。

ルービンは、マルクスの〈価値〉概念の理解にとって基軸をなすものは〈労働〉の概念であるとする。その上で、彼は、この〈労働〉概念の社会的同一性・通約可能性をめぐって「三種類の同等な労働を区別しなければならぬ」という。それは、①生理学的に同等な労働、②社会的に同等化された労働、③抽象的労働、である。そこから彼は、③の「抽象的でないし、抽象的に一般的・な労働」こそが「労働が商品経済で獲得する特殊な形態における社会的に同等化された労働」である、つまり価値の実体をなす労働なのだという。この労働概念は、〈価値〉の概念を内包したもので、つまり「労働生産物に固有の価値の形態がそこから生じる」ような労働相互の社会関係、「労働の社会的編成のあらゆる特徴」を含んでいる概念であって、①と②との〈労働〉概念とは区別されるべきだとして次のようにいう。

抽象的労働は商品経済の種差をなすが、これに対して社会的に同等化された労働は、たとえば、社会主義共同体においても見られる。抽象的労働は生理学的に等しい労働と一致しないだけでなく、社会的に同等化された労働一般とも同一視してはならない。……いかなる抽象的労働も社会的労働・社会的に同等化された労働であるが、しかし、社会的に同等化された労働がすべて抽象的労働と認められうるわけではない。社会的に同等化された労働が商品経済に特徴的な抽象的労働という特殊な形態をとるには、マルクスが正確に指示した次のふたつの条件が必要である。

(一) 異なる種類・個人の労働の同等性が「互いに独立な私的諸労働の独自に社会的な性格」……をなすこと、すなわち、労働がただ等しい労働としてだけ社会的労働になること。(二) この労働の同等化が抽象的形態、すなわち「労働生産物の価値性格」……で生じること。これらの条件が欠けていても、労働は生理学的に等しく、また社会的に同等化された労働でもありうるが、しかし、抽象的に一般的・な労働ではありえない。¹³⁾

このようなルービンの〈抽象的・人間労働〉規定は、明らかに「歴史カテゴリー説」に立つものであり、また関係論の規定を本質基盤とするものである。このことは、この労働の規定は、ルービンの場合、生産過程ではなく交換過程で遂行されるものとされることから追認されよう。ルービンはいう。「抽象的労働の概念は商品社会における労働組織の特定の社会的形態を前提としている。すなわち、個々の商品生産者間の関連性が、具体的労働活動の総体をなすかぎりでの生産過程それ自体において直接的に存在するのではなく、交換過程すなわちこれらの具体的諸特質の捨象を媒介として確立される、という形態を前提としている」と。すなわち「具体的労働種類の抽象的・人間労働へのこの還元は究極的には交換過程で実現されるのであり、直接的生産過程では、生産がはじめから交換をあてにしたものであるかぎり、この還元はいまだ予備的ないし観念的な性格をおびている」にすぎず、「交換が生産過程そのものの社会的形態になり生産過程がこうして商品生産に転化するにつれて、抽象的・人間労働は出現し発展する。生産の社会的形態としての交換が存在しなければ抽象的・人間労働を問題にすることはできない」と。つまり「商品経済においては交換だけが具

体的有用労働を抽象的人間労働に還元する」というのがルービンの立場なのである。彼は明言している。

抽象的人間労働の概念は、労働の脱個性化ないし同等化の過程が、労働を「社会化」する、すなわち、労働を社会的労働の総量のうちに含める、唯一の過程である、ということ的前提とする。この労働の同等化は、すでに生産過程において、交換に先立って（概念的なかで、予備的には）生じうるが、しかし交換を介さなければ、すなわち、ある労働の生産物が一定の貨幣に（概念的・予備的にではあれ）等置されることをおしめておかなければ、この同等化は生じえない。この等置は、それが交換を予想しているだけであるかぎりでは、現実の交換過程における実現ないし現実化をまだ課題として残している。¹⁸⁾

ということは、要するに、抽象的人間労働とは「生理学的範疇ではなく、社会的・歴史的な範疇である」ということである。

ルービンの「（抽象的人間労働）＝歴史カテゴリー説」の主張との関連において、ここでわれわれが特に強調した注意を喚起しておきたい点は、彼の「（抽象的人間労働）＝社会的労働」説の主張である。これは、諸個人の労働は、それがいかなるものであれ社会的労働という形態においてしか自己を実現できない、あるいは個人的労働は社会的労働へと転化することではじめて実現される、ないしはそれを不可避とするという主張である。そして、抽象的人間労働とは商品世界においてまさにこの個人的労働が転化すべき社会的労働の特殊歴史的な形態であるという主張である。

「商品生産者たちの労働がその社会的性格を顕示するのは、生産過程自体のなかで直接的に支出された具体的労働としてではなく、交換過程を介して他のすべての種類の労働と同等化されねばならない労働としてだけである」と商品世界における労働の社会的性格ないしは社会的に同等化される労働の特殊性に言及しつつ、ルービンは次のようにいう。「すべての具体的労働種類の（貨幣をつうじた）全面的同等待化およびこれらの抽象的労働への転化は、同時に諸労働の間に社会的関連を創出して私的労働を社会的労働に転化させる」。つまり「商品経済においては私的労働の社会的労働への転化は具体的有用労働の抽象的労働への転化と一致する」というわけである。これは、異種間労働の社会的・一般労働への還元の問題、異種労働の同一基準での計量可能性にかかわる問題であり、われわれの立ち向う課題にとって重大な問題提起をなすものである。われわれは、ルービンのこの問題提起をもまたここに登記しておくことにする。「私の商品生産者たちの労働活動の間の社会的関連は、すべて具体的労働種類の同等化を通してだけ創出され、この同等化はすべての労働生産物の価値としての同等化という形でなされる」という価値およびその実体的内実（社会的実体）の存立の被媒介的構制の問題としてである。

ルービンは、以上のようなスタンスから「マルクスにとって抽象的人間労働とは生理学的概念である」とする。ペ・ストゥルルーヴェヤコーン等の見解を鋭く批判する。「具体的労働は一定の形態における人間エネルギーの支出（裁縫、機織、等々）であり、抽象的労働は一定の形態にかかわりのない人間エネルギーそのものの支出である」というような彼らの規定、「この規定によると、抽象的労働の概念は社会的および歴史的要素を一切喪失した生理学的概念」ということになり、

これでは「生産のあれこれの社会的形態にかかわらずなく、すべての歴史時代に固有のもの」となってしまう。しかし、ルービンにいわせれば、マルクスが「抽象的労働の概念を価値の概念と切り離しがたく結びつけている」ということを瞬時も見落してはならない。抽象的労働は価値を『形成』し、価値の『内容』ないし『実体』をなす²⁵⁾ものである。「価値の概念はマルクスにおいては社会的で歴史的な性格を有している——そしてこの点にこそ彼の理論の独自性と功績がある——」のだから、価値を形成するものとしての抽象的労働の概念もこれと同じ基礎の上に構築しなければならぬ²⁷⁾。「抽象的労働としての労働の特徴はさまざまな労働支出の生理学的同源性とは少しも一致するものではない²⁸⁾」。確かに「生理学的労働は抽象的労働の前提をなすが、それは、人間による生理学的エネルギーの支出がなければどんな抽象的労働も問題になりえない、という意味においてである。ただし、この生理学的エネルギーの支出はあくまでも前提たるにとどまるのであり、われわれの研究対象ではない²⁹⁾」とルービンはいう。ルービンのこうした見解は——少なくともここまでは——われわれとその立場を共有するものである。このことを、いささか先取りした形ではあるが、ここで暫定的に述べておきたい。

以上のような『マルクス価値論概説』を中心としたルービンの抽象的・人間労働をめぐるいわゆる「社会学的規定」に対する批判を展開したのが、ヴァズネセンスキー、ダシコフスキー、コーン、シャプス等であった。この一九二〇年代ソ連におけるルービンのマルクスの価値論解釈をめぐる論争、批判と反批判の応酬が「ルービン vs コーン」論争として知られるものなのである。それは、実は、(抽象的・人間労働)

というカテゴリーをどのように把握するのかという問題が中軸をなすものであり、「その他の問題はこの中心論点のかかりにおいて取り上げられているにすぎない³⁰⁾」といってもよい程である。

この論争は、ルービンとコーンというよりも、むしろルービンとダシコフスキーその他の論争が中心であったとみなされるが、いずれにせよ、彼らルービン批判派の論者たちは、「共通して抽象的労働を生理学的労働として把握する」。ダシコフスキーによれば、「抽象的・人間労働は、人間エネルギーの単純な支出という観点からとらえた、労働の機能・発現・結果の多様性においてではなく労働の生理学的過程の一様性においてとらえた、社会的労働である³²⁾」。それは、社会の中の諸個人の多様な具体的形態の労働を物理的・自然的エネルギー支出という基底に還元すること(方法的基底還元主義)によって得られる概念である。従ってこの概念は超歴史的カテゴリーである。とはいえ、ダシコフスキーの場合は、この労働が現実的に完全な妥当性を獲得するのは、商品生産社会においてのみであるとして、これを「条件付きの歴史的なカテゴリー³³⁾」とするのではあるが。このような規定のしかたは以後、様々な表現をとって再三再四現われることになる。例えばコーンも抽象的・人間労働を「人間の生理学的エネルギーの合目的支出」として超歴史的カテゴリーとしながらも、この労働が価値を創造するのは「一定の形で社会的に組織されるから」であり、かかる社会的労働という形態をとった抽象的・人間労働が価値の実体をなすのであり、それは歴史的カテゴリーだという。これに対し、ルービンは、コーンの労働把握は、マルクスの労働の二重規定(具体的有用労働と抽象的・人間労働)とは異なり、三重規定(具体的有用労働・抽象的・人間労働・社会的労働)となっていると皮肉っている³⁴⁾。コーンに

よれば、前二者は超歴史のカテゴリー、後者が歴史のカテゴリーといふわけだ。蛇足ながらつけ加えておけば、こうしたコーン流の理解のしかたは今日でもかなり有力である。

重要なことは、このような「基底還元主義的方法」に基づく生理学的な抽象的労働の概念規定においてはじめて、この労働は唯物論的な實在性の基礎を獲得しうるのであり、また自然的計量単位をもってその量を測定・表現できうるのだ、という彼らの主張である。つまりルービン批判派にいわせれば、特殊歴史的な社会形態や社会関係をこの労働概念の基幹に据えるルービンの概念構成では、抽象的労働の物質性（唯物論的基礎）が蒸発してしまい、この労働が空中を浮遊する観念的なもの、實在的根拠をもたないものとなってしまふわけである。そればかりではない。「関係」や「形態」のみを過度に重視するルービン流の社会学的概念規定では、そもそも価値を量的に把握する根拠が失われてしまふとも批判する。

労働力は、本来、生産の過程で支出され対象化されるのである。それなのに、抽象的労働を交換の過程で規定し、しかもそれを関係規定・形態規定と了解するルービンにおいては、客観的なこの労働の量の規定はいかにして可能なのか。ルービンの主張では、価値の大きさは単なる商品相互の交換の割合あるいは価格の相対的比率を表現するものでしかなくなってしまう、価値それ自体の客観的大きさ（量）は測定不可能ということになる。そればかりではない。先に述べたように、ルービン流抽象的労働は、生理学説とは異なつて、物質的實在性の根拠を持たず、交換によってはじめて社会的労働となるというわけのわからない、いわば上空を飛翔する浮遊物―ダンコフスキーやシャブス流にいえば「空中楼阁」・「社会学的エーテル」―でしかないとなる

と、価値なるものもその客観的量が實在的対象性としては原理的に規定しえないということになってしまふというわけだ。ルービンが「新カント派的観念論者」・「社会学的修正主義者」等のレッテルを貼られ、彼のメンシェヴィキ出自にまで遡つて「反革命的なマルクス主義骨抜き論者」と論難される理論的な根拠の一つはここにある。⁵³

一九三〇年代に入つてスターリン体制の確立に伴つて、件の「ルービンvsコーン」論争は政治的な思惑から強制的に終了されるが、この時点で、〈抽象的人間労働〉をめぐる一種の公式的な見解がローゼンベルクによつて提起された。⁵⁴ ローゼンベルクは、『資本論注解』のなかで、一方の社会学的歴史カテゴリー説と他方の機械論（生理学説）の超歴史カテゴリー説との双方を批判しつつ、抽象的人間労働とは生理学的意味に理解された労働力の支出に還元されるにしても、そして商品生産社会での労働が社会的性格を有するのはこの労働に基づくものであるが、それはこの労働が社会的総労働の一部に還元されることによつてであるとする。そして、この還元は「商品の生産過程によつて客観的になし遂げられる」という。これは、両派の見解の批判的統一というよりも、われわれからすれば、むしろルービン批判派の超歴史のカテゴリー説と基本的に立場を同じくするところの折衷的な一ヴァリエーションにすぎない。だが、この見解こそ、以後の内外の〈抽象的人間労働〉解釈の正統派的典型となつていったものである。

B. 戦後における論争

戦後における〈抽象的人間労働〉の概念規定をめぐる論争は、後述

する「廣松vs宇野学派」論争は今一応別扱いとして、前節で概観しておいた戦前の論争のなかで論点はほぼ出つくしており、その基本的骨格の大枠は超えられていないように思われる。

戦後の論争は、〈抽象的人間労働〉を歴史的カテゴリーとする立場を主潮とするといわれているが、実は前節で述べた「妥協的歴史のカテゴリー説」、われわれからいわせれば「折衷的超歴史のカテゴリー説」ないしは「修正された超歴史のカテゴリー説」という感が強い。ローゼンベルクの正統派の見解のヴァリエーションといってもよいかもしれない。

戦後の論争を概括的に、個々の該当する論者にこだわらず整理・分類しておく。まず歴史カテゴリー説を基調とする立場であるが、論者によっては、〈抽象的人間労働〉を歴史的カテゴリーとする立場をとりながらも、この労働を交換過程ではなく生産過程における「機械制大工業での労働の単純労働化」に求め、この「社会的生産過程で日々行なわれている抽象化」の産物としての単純労働こそが〈抽象的人間労働〉であると主張する。これをさらに展開して、資本制的に充用される機械のもとで始めて現実に実存するプロレタリアートの労働という意味で歴史のカテゴリーとする主張もある⁸⁷⁾。

他方、この労働を、同じく資本制生産過程で規定される歴史的カテゴリーとしながらも、上述の主張を「技術主義的規定」と批判し、生産過程を技術的過程としてではなく、資本家と賃労働者との関係＝生産関係に定位して把え、この生産関係を介して賃労働が抽象化されて抽象的人間労働へと還元されるのだと説く論者もある⁸⁸⁾。

勿論、〈抽象的人間労働〉の実現すなわち労働の社会的抽象化は、生産過程においてではなく交換過程において求められるべきものとす

る歴史的カテゴリー説もある。この立場では、商品社会の無政府的な社会的分業における総社会的な商品交換の過程を介して実現される「社会的労働の配分の歴史的に独自の形式」において抽象化される労働、これが抽象的人間労働であって、従ってこの労働は商品生産体制にしか妥当しない概念であり歴史的カテゴリーだというわけである。比較的ルービンに近い主張である⁸⁹⁾。

ルービンとの関係で特記しておきたいのは、独特の「〈抽象的人間労働〉＝歴史的カテゴリー説」を展開した遊部久蔵である。彼は、〈抽象的人間労働〉を①範疇規定 ②実存規定 ③実現規定の三契機の統一として規定し、①は超歴史的规定、②は将来社会にも存在する規定、③は資本制商品経済に独自の規定とし、結局この三契機の統一規定としての〈抽象的人間労働〉は商品社会に固有の特殊歴史のカテゴリーだというのである。

因みに、①の範疇規定というのは生理学的等質労働としての労働規定をいい、これは歴史貫通的规定とする。②の実存規定とは、生産過程に機械体系が採用され単純労働化される時に始めて抽象的人間労働は実存することになるという「簡単労働」の規定であって、この機械体系下の労働規定は将来社会においても残るということである。③の実現規定というのは、価値の実体としての抽象的人間労働規定のことであって、抽象的人間労働が現実的・具体的に実現されるのは商品の価値の実体としてである。この価値化される労働規定は商品を生産する労働の独自の社会的性格に由来するものであり、それは商品経済の構成契機たる「分業と私有財産にもとづく商品＝資本制経済に独自の規定である」とする⁹⁰⁾。このような遊部の主張をルービンの主張およびそれまでの係争史においてどのように位置づけるかは、ここでは問わ

ないことにする。

次にわれわれは、戦後における「抽象的人間労働」超歴史カテゴリー説を概観しておくことにしよう。超歴史説の主張も、歴史説の場合と同様に、論者によって微妙なニュアンスの違いがあるが、基本的には、この主張は件のマルクスの生理学的エネルギー支出の主張をその論拠としている点では共通している。例えば、人間の脳髓や筋肉等労働力能の対自然的な生産的支出に他ならない抽象的人間労働は、いうまでもなく超歴史的に一般的規定であるのは当然のとであって、そもそも人間の労働は、およそどのような社会にあっても、つねに具体的有用労働と抽象的人間労働との二面性から成り立っており、したがってこの労働の二面性・二重性を特殊商品社会にだけみるのはまったくの誤りであると論定する主張がその典型をなす。

但し、この二面性が「商品の二要因すなわち商品自身の自然属性として、自立した形態をとる」のが「商品社会の本質的特徴」であるという条件をつけるのが普通であるが、とりわけ、抽象的人間労働が社会的性格を受け取るのは、それが「対象化した形態をとった場合にのみ」であり、それが対象化した形態で社会的労働となるのは商品生産社会においてのみである、というわけである。例えば、「他の社会とちがって、商品生産社会では、抽象的人間労働が労働生産物に対象化し、凝固した形において、商品自身の価値となり、商品自身の力として、人間に対立するということである」というようなこうした主張は比較的ルービン批判派の主張に近いといえよう。^④

われわれは、ここで超歴史説の概観を中絶して新たに登記しておきたい問題がある。それは第一に「労働の個別性と社会性」ないしは

「個人的労働と社会的労働」という対カテゴリーと「具体的有用労働と抽象的人間労働」という対カテゴリーとの関係をどう把握するかという問題である。第二に、それら各々のカテゴリーもしくは二つの対カテゴリーは超歴史的なのか歴史的なのかという問題、とりわけ「社会的労働」をどちらの規定において把握するのかという問題である。第三に、「社会的労働」なるものは一体何なのか、そのようなものは個々の労働と同じような意味で実在するものであるのか、それとも単なる総称概念としての抽象的普遍を表わす名辞にすぎないのかという問題である。

元に戻って、戦後の「（抽象的人間労働）＝超歴史カテゴリー説」の主張をもう少しフォローしておくべく、見田の超歴史説の立場をみておこう。彼は「抽象的労働そのものは労働の永遠の一側面」であって、それは価値の形態をとる場合もあれば、そうでない場合もある、とする。商品の価値は歴史的なものであるが、価値の実体・内容としての抽象的労働そのものは「それ自身としては生理学的な事実、たんなる自然的事実」であって、「少しも商品生産に特有のものではない」。ただ、それが商品の価値の実体という形態をとる場合には、それは「二つの社会関係をあらわすもの、一つの社会的実体となる」にすぎない。だから歴史的な商品の価値の完全な理解のためには、この本来は「非価値的な非歴史的な第三者としての」抽象的労働に下向していくことが肝要になる、というわけだ。この抽象的労働という基体に商品生産関係という社会的形態規定が与えられてはじめて価値概念がえられることになるのである。^⑤

以上のような超歴史説が論拠とするものには、前述しておいたマル

クス自身による主として第二節における〈抽象的人間労働〉規定であるが、それに加えて第四節の「物神性論」のなかでの「価値規定の内容」の超歴史性の規定や第二篇・第四章の「労働過程」論での労働の歴史貫通性の規定等が挙げられる。これらの記述の意味するところの内実に関しては、われわれとしても、別の機会に検討していくこととするが、ここでとりあげておきたいのは、超歴史説のもう一つ別の論拠をなすいわゆる「社会主義社会における価値法則」をめぐる問題である。これは、社会主義社会においても財の生産に労働力が支出されねばならず、それゆえ財生産のための労働配分と財（生産物）の分配・消費のための配分基準として各自の支出労働時間の査定のためには、社会的労働としての抽象的人間労働とその時間の機能と役割は依然として必要であり残る、という主張である。この係争問題もまた決着がついているわけではないけれども、もしかかる主張の妥当性が認められるとしたら、〈抽象的人間労働〉とは特殊歴史的な商品社会に固有のカテゴリーであるとする歴史説の主張では具合の悪いことになり矛盾に直面することになりはしないかということから、件の歴史カテゴリー説への批判へとつながっていく。例えば吉原は、かかる観点からも超歴史説を主張している。「われわれは抽象的人間労働という属性における人間労働の把握なしには、社会主義的経済計画は成り立たないと考える。ただし……社会主義的生産にとって、社会的総労働の合理的配分・編制は不可欠であり、このことは、現実的労働の抽象的人間労働への科学的還元を必至ならしめるからである」と。この見解には、「社会的労働≡抽象的人間労働」・「抽象的人間労働≡社会的労働」すなわち「社会的労働としての抽象的人間労働」という規定は歴史貫通的な労働の社会的形態規定だということが含意されている。

この問題は先に登記しておいた問題のヴァリエーションということになろう。

この「社会主義と価値法則」をめぐる問題は、一九二〇年代の「ルービン vs コーン」論争の一つの主題でもあったものであり、ルービンは実はこの批判をうけて自己の主張を修正・補完しつつ件の「三種類の同様な労働」の概念の提起を余儀なくされたのであり、〈生理学的に同様な労働〉および〈抽象的労働〉とは別に〈社会的に同等化された労働〉なる一種の超資本主義的カテゴリーを新規に導入せざるを得なくなったのであった。吉原の上記の主張も、実際はルービンの歴史カテゴリー説を視野に入れつつそれを批判したものであったのである。

C. 「廣松 vs 宇野学派」論争——論争の今日的な総括のために

われわれは、これまで、〈抽象的人間労働〉をめぐる係争問題を、さしあたって「歴史的カテゴリー説」と「超歴史的カテゴリー説」の対立図式を視座にして概観し、われわれにとつての問題点のいくつかを登記しておいた。今やわれわれは、上述の係争問題を暫定的に総括し、二一世紀の視点からこの問題の意義を照射すべく、両説のいわば今日の形態の代表見本として廣松渉と宇野弘蔵およびその学派とのこの労働概念をめぐる対立・論争をとりあげておくことにしたい。

この論争は、直接には、一九七四年刊行の廣松の『資本論の哲学』への批判・反批判の形で展開されたといつてよいであろう。そして、それはその後の「宇野経済学への視角」をはじめとするマルクス経済学批判をめぐる廣松の諸々の著述に対する批判と反批判の応酬として継続的に行なわれた。しかしながら、これらの論争はかならずしも議

論がかみ合ったわけでもなく、結局の所、この種の論争の常であるように「尻切れとんぼ」のままに中断したというのが実情であろう。にもかかわらず、われわれが上述の係争問題の暫定的総括のために両者をとり上げるのは、それらがこの問題をめぐる最も新しい論争の一つであるという理由からだけでなく、これまでの論争のエッセンスが濃縮的に表現され、対立の構図がより鮮明に浮き彫りにされているとみられるからだ。

それだけではない。ここには、〈抽象的人間労働〉規定をめぐる新たな視圏も切り拓かれていく。廣松が『資本論』ひいてはマルクス思想の世界観上の地平の独自性を斬新な形で問題提起し、そのことによってマルクス「経済学批判体系」の伝統的な把握と解釈を根源的に「再構成・脱構築」すべしとしたのに対し、周知の如く宇野もまた伝統的マルクス理解を超えて画期的な『資本論』の原理的再構成を提起した。ところが両者の〈抽象的人間労働〉把握に定位して言えば、新たな問題視角からではあるが、期せずして前者は「歴史説」、後者は「超歴史説」の典型という形で主張されるものになっている。その上、廣松においては、近代的な世界観の超克を企図して「科学主義的」「資本論」把握への批判が基調となっているのに対し、宇野の場合には「科学主義」的把握の純化が企図されているため、両者の〈抽象的人間労働〉規定の差異が世界観上の対立構図を地として展開されるものとなっている点も対照的である。

二一世紀におけるマルクスの思想の意義をどのように捉え位置づけるかに関して、このマルクスの世界観の地平をどのように了解するのがあるいはいかに了解すべきかをめぐる方法的視座の対立構図は決定的に重要であると考える。われわれが、ここで、「廣松 vs 宇野 (学派)」

論争をとり上げる理由の一つはそこにもある。

われわれは、まず「超歴史のカテゴリー説」の今日的形態の典型たる宇野の〈抽象的人間労働〉規定からみていくことにしよう。

宇野は、価値の体的規定それゆえ抽象的人間労働のそれを、マルクスとは違って、商品論から生産論へと移すことによって、マルクスの論証の欠陥を克服しようと企図した。つまり、商品の価値およびその実体としての抽象的人間労働は、商品の交換関係から直接に蒸留法的に抽出するという方法によって遂行されるべきではなく、資本による価値の形成＝増殖の實在的過程に定位して規定されるべきだとしてわけである。

その際、宇野は、『資本論』冒頭の第一篇・第二篇を「流通論」として純化して整理し、「商品」・「貨幣」・「資本」の形態論的規定をまず与えるとともに、それに後続する『資本論』第三篇の冒頭章（第五章労働過程と価値増殖過程）を「労働＝生産過程」論と「価値形成＝増殖過程」論に再整備し、抽象的人間労働規定の論証は単なる思弁的抽象としてではなくその実態のプロセスに定位してここで行うべきであるとする。重要なことは、宇野の「労働＝生産過程」論の画期性である。マルクスの場合「労働過程」を使用価値の生産を行う労働の歴史貫通的な一般的規定を与える個所とし、従ってここでの「単純で抽象的な諸契機において叙述」される「労働過程」論においては、「一方の側に人間とその労働、他方の側に自然とその素材があれば、それで十分」であるとされた。つまり、ここでは「労働者を他の労働者たちとの関係において叙述する必要がなかった」。すなわち、ここで問題とされるのは、「諸使用価値を生産するための合目的活動

であり、人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、人間と自然との間における物質代謝の一般的条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であるような「すべての社会的形態に等しく共通な」具体的な有用労働の労働過程であった。^④ 諸労働の社会的関係を表示する価値に対象化される労働、すなわち抽象的人間労働は、ここ「労働過程」論では一切問題にはならなかった。

これに対し宇野の場合、マルクスのいうような「労働Ⅱ生産過程」こそあらゆる社会の存立・存続のための基本原則（経済原則）が貫徹・具現される過程（「人間生活の絶対的基礎」）であると規定した上で、この過程で行なわれる労働自体が実は「二重の性質を持つている」のであって、マルクスの指摘する労働の二重性の事態はここで規定されるべきものとする。そして、労働の二重性すなわち「具体的な有用労働と抽象的な人間労働との二面は、……あらゆる形態の生産過程に当然のことである^⑤」とみなす。つまり、労働の二重性（具体的有用労働と抽象的人間労働）とは、あらゆる社会形態に共通してあらわれる「労働Ⅱ生産過程」における人間労働に固有の二重規定ということがある。

因みに、宇野のいう「経済原則」とは「いかなる社会も人間の物質的生活資料の生産、再生産を基礎とすることなくしては存在し得ないという原則^⑥」をいうが、より敷衍していえば「全社会の労働力を生産手段と共に、それぞれの生産物の生産に必要とせられる程度に配分することによって、年々の再生産を継続するという、経済生活の合理的処理に当然なる、いわばあらゆる社会に共通なる経済の原則^⑦」ということになる。労働の二面性、従って具体的有用労働と抽象的人間労働という規定は、この経済原則の貫徹・客観化に相即して与えられる人

間労働の普遍的な規定であって、決して特殊歴史的な規定ではないということである。

以上のことから明らかなように、宇野流に言えば、あらゆる時代のかつあらゆる形態の労働には抽象的人間労働の側面はあり、例え社会関係の編成のあり方がどのように変わろうとも、人間の労働は、それ自体、抽象的人間労働としての共通の質を持つことになる。だからこそ、この労働は「社会的実体」と規定しうるのである。しかし、留意すべきは、だからといって「すべての労働が価値形成的だ」というわけではない。この労働が価値形成的な機能を有するのは、特殊歴史的な商品経済社会にあつてのみである。これ以外の社会においては、抽象的人間労働そのものは実在するが、それは価値形成的ではないし価値の実体として対象化されて表わされることもない。

かくして宇野は、その後の「価値形成Ⅱ増殖過程」論において、先の労働の一般的規定を実態的基礎とする商品生産労働の価値への対象化に即して、「価値関係の必然的基礎」あるいは価値の実体としての抽象的人間労働の必然的基礎の論証を行なうのである。この論証のポイントが「労働力商品」の価値である。要するに「個々の労働生産物が資本の生産物として社会的に流通する過程」において労働者がある労働力の再生産のために、「その労働力の代価として受取る賃金」によって各々の労働生産物としての生活資料を資本家の各々から買い戻すという総社会的関係を前提として、労働者の生活資料としての商品の価値の形成と、それを基軸としそれに根本的に規制されざるを得ない諸商品の価値規定との根拠が論証されていくのである。「労働力なる商品が、その生産に要する労働時間によって代価を支払われるということは、生活資料の代価がその生産に要する労働時間を基準に支払

われることを意味するばかりでなく、生産手段もまた社会的にはその生産に必要な労働時間を基準にして比較計量せられることにならざるを得ない^④という論理をもつてである。

商品の価値が、その実体としての「労働＝生産過程」で遂行される様々な財を生産するのに要する総労働の同質的な一部を構成するものとしての歴史貫通的な抽象的人間労働、この社会的労働によって規定されつつ、「価値形成＝増殖過程」において現実的に対象化されることの必然性はこのようにして論証されるのである。その上で、この労働とは、人間が自然に対して一定量の労働を支出・投下して生活財を得るための労働として、つまりいかなる社会形態の生産過程にも共通な「生理学的エネルギー支出」として人間労働に本質的・本来的な規定といわざるを得ないとされるのである。この労働はまた、追加労働時間を構成するものとして、「生産的労働の社会的規定」としては剰余労働として規定されて表わされるが、この剰余労働としての抽象的人間労働を実体的基礎にして剰余価値という特殊資本制生産に特有な価値が増殖的に生産されるのである。

このようなわけで、宇野流にいえば、労働の二面性・二重性は超歴史的であり、従ってその一契機たる〈抽象的人間労働〉は、当然、超歴史のカテゴリとして規定されなければならないものとみなされるのである。但し、前述したように、この労働が価値に対象化された形態で表わされるのは商品社会においてのみであり、またこの労働が単純な労働力の支出して、いわゆる標準的な「単純労働」に還元されて現われるのは、現実には機械制生産の普及下にあつて、特別な技能・熟練を必要としなくなる条件下においてであり、そして資本もこの労働力商品を購入して、任意の商品を自由な競争にもとづいて生産しう

る社会的条件下においてであるとするのは、この学派の基本的立場である。流通形態（商品・貨幣・資本）が生産過程を包摂するという歴史的条件の定礎に伴う商品による商品の生産、この生産過程における「超歴史的な抽象的人間労働」の価値への歴史的な対象化である。

このような宇野流「超歴史説」の主張が、これまでのべてきた従来「超歴史説」とどう違うかに関しては、ここでは問わないことにする。

われわれは、次に、宇野流の「〈抽象的人間労働〉＝超歴史のカテゴリ説」の対極に位置する廣松「歴史カテゴリ説」を概観しておくことにしよう。

一般に、廣松のマルクス研究がわれわれに衝撃をもたらしたのは、いわば袋小路に入り込んだ二〇世紀後半のマルクス研究に、哲学的世界観の準位にまで下向して、マルクス思想の立脚する独自の世界観の地平を明るみに出すとともに、この基礎作業・ボーリング作業に基づいてマルクスの原思想を根源的に再構成しつつ同時にその今日的な展開の可能的地平を開示したところにある。マルクス思想の基本的な構えは、近代思想のそれとは本質的次元において異なっており、諸理論が暗黙に依拠し前提にしている基本的な理論上の枠組すなわち知の原理的パラダイム——哲学的な抽象の準位でいえばヒュボダイム——そのものが、マルクスと近代主義的諸思想では、根源的かつ本質的に異なっていると問題提起する。その上で、この問題意識を本格的に掘下げ基礎づけてこなかったないしは稀薄であったこれまでの多くのマルクス研究は、結局の所は、近代主義的パラダイムの地平でしかマルクスを捉えてこなかったのではないかという問題提起である。例えば、

オーソドックス・マルクス主義の科学主義的マルクス理解も、また西欧マルクス主義流の人間主義的マルクス理解も、所詮は近代的パラダイムの地平における「科学主義vs人間主義」の Wechselspiel の埒内の対立のヴァリエーションでしかなく、その意味ではそもそもこれまでのマルクス解釈はマルクスの誤読の歴史ではなかったか、という批判的見解が廣松によって展開されたのもこのためである。

廣松によると、マルクスの思想が近代思想のパラダイムを超越していると考えられるゆえんのは、近代的世界観の依拠する実体主義的な「主-客」関係図式の構図を止揚し、「四肢構造論」的な「認識論」存在論」的関係主義の図式の地平を切り拓いたものとなっていること、これを特殊認識論的局面に定位していえば近代認識論の「三項図式」に依拠する認識観、存在論的局面においては「実体の第一次性」に基づく存在了解、これらの近代的世界観のパラダイムに代えて、いわば「共同主観性」の四肢構造論的認識論「関係の第一次性」に定位した関係論的存在論」という新たな世界観に立脚するものになっているという事態を根拠とするものである。より根源的には「物的世界観から事的世界観」へのパラダイム・チェンジとして表現される態のものとなっているということである。それは、マルクス自身の思想的展開に即している。例えば、件の「疎外論の論理から物象化論の論理への転回」に相即するものであり、この新たなパラダイムの成立現場を『ドイツ・イデオロギー』にみる主張となっている。

『資本論』の読解においても、この問題を対自化しながら、「物象化論を視軸」として読み解くのでなければ、マルクスの理論の核心の看過ないしは誤読を招来しかねず、実際そうした誤読の嫌疑はこれまでの多くのマルクス解釈においても払拭されてこなかったのではない

かというのが廣松の主張である。廣松はいう。

『資本論』といえ、専門家諸氏のあいだですら紛々として異見の岐れるところであり、一介の哲学者が容喙することは無謀の譏りを免れ難い事かと惧れる。解釈上紛糾を生じている諸点、なかんずく価値論をめぐる諸問題は、しかし、マルクスの方法論上の構制ひいては存在論的・認識論的次元を解析する『哲學的』作業なしには所詮無用の錯綜を防遏できない看があるということ、この憾もまた併せて禁じ難い。けだし、不遜をも憚らず稿を起こした所以である。¹⁹

廣松の〈抽象的人間労働〉規定もこのような問題意識にもとづく新たな方法論的視座と論理（物象化論）を視軸として展開されている。廣松によれば、〈抽象的人間労働〉とは、生産過程において支出・投下された人間の労働力が生産物に凝固された形で表わされたものとして理解されてはならない。つまり、それは、人間の労働力という生理学的エネルギーの対象化されたものとして、つまり客体化された人間労働一般という超歴史的なカテゴリーとして理解されるべきではない、という。それは、概念的に了解されてきた意味での自然的ないしは物的な内容において規定される労働ではなく、諸個人の私的に具体的な労働（具体的有用労働）が、その総社会的関係の媒介において、彼らの労働の社会的統合ないしは社会的構造化を介して産出された社会的形象態、すなわち前者とは全く異質の内容において構成・措定された、独特の労働の社会的あり方をいう。それは、近代科学主義流にいえば、物的実在でもなければいわんや心的実在でもない。マルクス流にいえ

ば「超自然的」・「超感性的」な、それ自体としては理念的とでもしかいような特殊な「社会的実体」——廣松はこれを独自に「意義態」としての物象と規定する——ということになる。これは、科学としての経済学からみれば「形而上学的対象性」としてしか規定しようのない「幻のような対象性」を有する労働である。それは、具体的・現実的な諸個人の労働の社会的抽象化の産物にして、諸労働の社会的諸関係の物象化態あるいは相互依存関係作用による社会的形象態 (Gebilde) としては措定態 (Gesetzte) という、存在論的には具体的労働とは異次元にある社会的実在態なのである。このような意味において、この労働は、特殊な社会関係の反照規定なだとされるのである。

価値は、主体・客体 (人間・自然—引用者) の直接的な関係によって創出される物的な形成体ではなく……実は「一つの社会関係」「社会的な形成体」なのであります。疎外論的「主・客の論理」と「物象化の論理」とが決定的に異なるという所以でもあります。が、「価値」とは、こうして人びとの或る即自的な社会的協働が物象化されて etwas objectives (客観的な或るもの) として仮現的に現象したものにすぎません⁵¹⁾。

ということ是要するに、「真実には、商品体の内部に価値なるものが実体相で実在しているわけではなく、抽象的人間労働なるものが凝固的に対象化するわけでもない」のであって、「物象化された視角では Substanz (= 実体) として価値実体が措定されるとはいえ、これとしてその真実態においては『人と人との物を介しての関係』の『反照の規定……』なのである⁵²⁾」と廣松はいう。

廣松は、また、マルクスの奇妙な命題、すなわち「人々は、彼らの労働生産物を同種の人間の労働の物象的外被だとみなすが故に労働生産物を互いに価値として関連づけるのではない。逆である。人々は、交換において、彼らの異種の生産物どうしを価値として等置することによって、彼らの異種の労働を人間の労働として等置するのである⁵³⁾」という命題を祖上にのせ、抽象的人間労働の表現の被媒介性 (廻り途) とともにこの労働の形成機序と存立構造の被媒介性 (廻り途) の問題を明るみに出す。それは、生産過程で対象化された労働が交換過程でつき合わされ、この総社会的な相互関係において抽象化・対象化されて「社会的普遍労働」へと転化される運動における被媒介性でありその論理をいう。抽象的人間労働とはこの運動の産物というわけである。マルクス流にいえば、「労働生産物は交換の場面においてはじめて、感性的に相異なる使用対象性から引き離された、社会的に同等な価値対象性をもつようになる⁵⁴⁾」ということである。

廣松においては、従って、労働の二重性は、宇宙の場合のように、具体的有用労働と抽象的人間労働という規定において超歴史的であるのではない。この概念での二重性規定は、特殊歴史的な労働の二重性の形態規定である。廣松にとって超歴史的な労働の二重性の論理的な規定は「(協働)としての(労働)」という規定である。後段におけるわれわれ流の表現でいえば、諸個人の労働の社会性と個別性 (労働の社会的形態と個別的形態ないしは社会的労働と個別的労働) という労働の一般的规定においてそれは歴史貫通的な論理規定と理解されるべきだということである。それは社会的存在——「われわれ」としての「われ」——としての人間、この規定における人間の一方では有用労働として一定の社会的欲望を充たさねばならない労働 (有用労働一般)

労働の個別性Ⅱ各個労働」と、他方では他人の労働との社会的な相互関係を充たさなければならぬ労働（労働一般Ⅱ労働の社会性Ⅱ社会的労働）との二重性をいう。特殊歴史的な商品社会においては、生産者個々人の労働は直接には私的労働として現われる。この私的労働の件の二重性がこの社会では「具体的有用労働と抽象的・人間労働」という形態規定をとるのである。具体的有用労働と抽象的・人間労働とは、商品世界における私的労働の個別性と社会性として規定されるべきものであるということである。

しかしながら、この私的労働の社会性は、それ自体、二重の社会性として理解されなければならない。というのは、私的個人の具体的有用労働は、一方では商品社会においては、他人にとっての有用な労働でなければならず、また社会的分業の構成契機としての社会的な役割において機能しなければならないから、つまり「社会的・有用労働」でなくてはならないからだ。また、他方ではそれは、相互に独立した無縁な私的労働の異質性を超えて、他人の労働と内的に有機的な関連をとりうる「相互に同等な人間の労働Ⅱ商品世界・内・社会的労働」として機能しなければならないからだ。後者の意味での労働の社会性こそが抽象的・人間労働として表わされて機能する労働の特殊な社会的形態なのだ。廣松は、このことを次のようにいっている。

労働生産物の「有用物と価値物とへの分裂」は、交換が「十分な広がり」と重要性をもつようになつたところでその実を示す。この時から、マルクスによれば、生産者たちの私的労働は「二重の社会的性格」をうけとる。すなわち、一面では、それは有用労働として一定の社会的欲求を充たさねばならず、そう

することで自分を総労働の分枝として実証しなければならない。他面では、それは他人の労働と同等な人間労働として自己を証示しなければならぬわけであるが、相異なる諸労働の同等性ということとはもっぱら現実の不等性を捨象することによつてしか存立しえない。「私的・生産者たちの頭脳は、彼らの労働のこれらの二重の性格を、それらが生産物の交換において現われるがままの形態で反映する」……すなわち、私的労働の社会的有用性を生産物の社会的有用性という即物的な形で、そして、異種の諸労働の社会的同等性を労働生産物がそなえている共通な価値性格という形態で投影するわけである。⁵⁴

要するに、商品世界における人々の日常的意識（通念）においては、「商品としての労働生産物」の社会的欲求を充たす有用性は使用価値という即物的形態で理解され、その交換上の社会的同等性は価値という規定に投影されて了解されているということである。前者の使用価値に対象化される労働が具体的有用労働、後者のそれが抽象的・人間労働に該当することになるというわけである。

以上が廣松の立場からする「（抽象的・人間労働）Ⅱ歴史カテゴリー説」の概要である。この主張が宇野の「超歴史のカテゴリー説」とは対極的な位置を占めるものであることは改めて指摘するまでもあるまい。われわれは、この廣松と宇野との主張を対質させつつ検討・吟味すべく、後段において廣松の宇野（抽象的・人間労働）概念批判を論材にして詳しく展開していくはずである。ここでは、とりあえず、問題の所在とそのプロブレマティクを明るみに出すことに留めて、一旦迂回してわれわれの論考を進めていくことにしたい。

〔註〕

- (1) E.V. Böhm-Bawerk, *Zum Abschluss des Marx'schen Systems*, 1896. (木本幸造訳『マルクス体系の終結』未來社、一一六頁)
- (2) 「もとめられた『共通なもの』として労働をマルクスが蒸留して取り出す論理的な方法的な操作……この操作は、わたしにはマルクス理論の最大の弱点をつくっているように見える……。」(同上書、一一六頁)
- (3) 同上書、一二六頁～二七頁
- ベームは、また、「マルクスが価値の唯一の基礎としての労働についての彼の根本命題をその体系のなかへ持ちこむのに用いている論理と方法論」は「弁証法的な手品だ」と明言もしている。(同上書、一三二頁)
- (4) 「マルクスの第三巻は、その第一巻を否認している。」(同上書、六〇頁)
- (5) ヴェームは、「おおよそ価値どおりでの諸商品の交換は、生産価格での交換に較べて、単に論理上だけでなく歴史上においてもまた生産価格に先行するものとみえることは、まったく適切である」(KMS, 156)あるいは「価値どおりでの、または、おおよそ価値どおりでの諸商品の交換は、生産価格での交換にくらべて、はるかに低い段階を必要としている」(ibid.)というマルクスの命題に対して、これをきっぱりと否定する。ヴェームはいう。「その仮定は内面から見て、ありそうにもないことであるし、また、ここで経験による検証についていえるかぎりでも、この経験上の検証は、その仮定に反対しているのである」(ヴェーム、同上書、八一頁)と。「価値法則は『原初』の諸状態においても現実支配していないのである」(同上書、九二～三頁)と。
- (6) R. Hilferding, *Böhm-Bawerks Marx-Kritik*, 1904. (玉野井芳郎・石井博美訳『マルクス経済学研究』法政大学出版局所収「ベーム・バヴェルクのマルクス批判」、一三七～一四四頁)
- 「わたくしが、『使用価値がそのもとで現象するところの特殊な状況』をすなわち具体性そのままの使用価値を捨象するばあいには、わたくしは、わたくしにとって使用価値一般を捨象したのである。なぜなら使用価値は、わたくしにとっては……その具体性においてのみ、これこれの性質をもつ使用価値として存在するものだからである。」(同上書、一三七頁)
- (7) 同上書、二一九頁
- (8) 同上書『資本論入門』(河上肇全集 一二)岩波書店、一九八四、一六九頁
- 「吾々がここで問題とするところは、……近代的範疇としての捨象的労働である。だからそれは、形式論理的に考えられた普遍的表象としての抽象的概念―種々なるものの相互に区別される特殊性を棄て去り、同一の共通性を確執することによって成立するところの、抽象的な普遍性(ヘーゲル)―と全く異なる。」
- 「……ここに吾々が商品価値の実体となすところの捨象的労働は、かかる簡単な捨象物を創り出せる社会的諸関係と同様に、全く近代的な範疇である。商品生産が高度の発展を遂げた近代社会においては、多種多様な労働生産物の全面的譲渡が行なわれ、それらのものが互いに相等しとされる結果、それらの一々の生産物に対象化された種々なる具体的諸形態の労働が、はじめて実際的に、一様な無差別な人間労働としての存在の一面を獲得するに至るのである。すなわち、……マルクスの手紙の中にある言葉でいえば、『社会的労働の連絡が個人的な労働生産物の私的交換として行はれるような社会状態』が創り出したものであり、かゝる社会状態の存在せざるどころに存在しえざるものである。」
- (9) 同上書、二二二頁
- 「かくて吾々は次のことを知る。使用価値を創造するものとしての有用労働は、最初から如何なる社会状態のもとにも存しうるが、商品価値を創造するものとしての・従ってあらゆる労働の諸形態を代表するものとしての・捨象的な人間労働は、商品生産の発展に伴うて始めて現実的に存在するものとなるのである。」(同上書、二二二頁)
- (10) 榎田民蔵『価値及貨幣』(『榎田民蔵全集 第二巻』、改造社、一九四七)三一頁
- 因みに、榎田においても、価値の実体としての抽象的人間労働とは、生産過程においてではなく交換過程において形象化される社会的労働の特殊な形態であることが明確に把握されている。

「……商品を生産する各個人の労働は、商品社会の総労働の一分子として始めて価値、即ち平等な人間労働となる……。然るに個人の労働が社会の総労働の一分子たるためには、それ等諸労働の特殊な生産物が社会の必要を充たすこと、従ってまた商品の交換が前提とされている」(同上書、三〇頁)とした上で、「もちろん、社会が必要とする一定の生産物は、社会的な人間労働の支出にもとづくこと、そして社会はその如何なる方法に依つてかを問わず、これらの労働を各産業部門の間に適当な比例に分配することは、商品生産社会たと社会主義社会たるとその他の社会とに依つては異ならない。それは社会がその生産発達を継続する限り廃止せられることのない自然法である」が、「商品生産社会以外の社会的生産に於ては、労働生産物は、その自然的形態に於て直接に社会的であり、またその生産に支出せられた労働時間は直接に社会的労働時間であり得る。これ、それ等の社会に於ては個人の労働は初めから社会的全労働の一分子であるからである。独り商品生産の社会に於ては、個人の労働の生産物は交換せられて初めて現実に社会的性質のものと認められ、その生産に支出せる個人の労働時間は交換せられて初めて現実に社会的総労働の一分子となる。そこに商品生産が他の社会的生産と区別されるべき特徴がある」(同上書、三三頁)という。この榊田の見解は、われわれの後段における議論の展開にとつて、決定的に重要な論点を含んでいる。長くなることをいとわず、ここに引用しておく所以である。もう一ヶ所だけ引用しておく。

「知るべし、商品価値の単位たる単純な人間労働なるものは、歴史に超在する抽象的個人の抽象的労働ではなく、商品社会と云う特定の社会関係の下に於ける私的個人の労働が交換の作用を通して取るところのまた取らねばならないところの特殊な社会的労働の一形態であることを。それは有用的に用いられて使用価値を作る具体的な人間労働ではなく、一般に人間労働であり社会的労働時間に還元せられる。この意味に於て価値は社会的客観的である。」(同上書、三一頁)

(11) 同上書、九一頁

「……一般的人間的労働は、それを生んだ特殊な時代に限り完全に通用するもので、凡ての時代に普遍的な妥当性を有するものでは

ない。それ故に、かの『抽象的一般的』『抽象的人間的』と云う詞の中には二つの意味が含まれる。一つは、物理的能力の支出としての労働の内容を示すものとしての抽象的一般的であり、他は、労働の社会的形式を示すものとしての抽象的一般的これである。前の見地に於ては、マルクスはスミスやリカルドと異なるところが無いが、後の見地に於て根本的に異なる。」

榊田は、別の所では、また次のようにもいつている。
「マルクスはリカルドの価値論に賛否共に詳細な批評を試みて居るが、非難の要点は、リカルドが労働を内容的に見ただけで、形式的に見なかつたと云うことにある。この形式の点に於て、マルクスの特徴がある。形式とは所謂『一般的人間的』という特殊な形式のことである。この形式に於て、労働は社会的労働として価値の実体である。」(同上書、九六頁)

(12) イ・イ・ルービン『マルクス価値論概説』、竹永進訳、法政大学出版、

八八頁および一三〇頁

(13) 同上書、一三〇〜三一頁

(14) 同上書、一三五頁

(15) 同上

(16) 同上書、一三五〜三六頁

(17) 同上書、一三九頁

(17) 同上書、一三四〜三五頁

(17) 同上書、一三五頁

(20) 同上書、一二〇頁

(21) 同上書、一一一頁

(22) 同上

(23) 同上

(24) ルービンの『マルクス価値論概説』等に対する批判者達の主要な論文やルービン批判の概要は『ルービンとその批判者たち―原典資料二〇年代ソ連の価値論論争』(竹永進訳および解説、情況出版、一九九七年)を参照されたい。

(25) イ・イ・ルービン『マルクス価値論概説』、一二三頁

(26) 同上書、一二七頁

(27) 同上書、一二六〜二七頁

(28) (29) (30)

同上書、一二四頁
同上書、一二八頁

竹永進は、同上書「訳者解説―ルービンのマルクス価値論解釈と一九二〇年代ソヴェトの価値論争」のなかで、きわめて明瞭に次のようにいつている。

「概説」をめぐる論争は……この書物の全域にわたっているのではなく、「抽象的人間労働」という範疇をどのように把握するかという一点をめぐっており、その他の諸問題はこの中心論点とのかかりにおいて取り上げられているにすぎない。」(同上書、五〇九頁)

一九七〇年前後に生じた欧米諸国におけるいわゆる「マルクス・ルネッサンス」の動きのなかで再発見され見直されてきたルービン理論は、制度化されたマルクス経済学を有するわが国においては、殆んど本格的には注目されることはなかった。彼が注目されるきっかけは、廣松による「マルクスにおけるペイリー・シヨック」という件の問題提起によってであろう。この問題は、実は、すでにルービンがいち早く提起していた問題で、廣松自身、当初はまったく知らなかったものであった。

独自の問題意識からルービンに注目していた竹永によって、忘れ去られた理論家ルービンが欧米に遅れること二〇年して日本に紹介された彼の著者をはじめとして主要な論争の資料が翻訳・紹介された意義は実に大きいといわざるをえない。また、ルービンに関する解説・論評もこれまでのところ竹永を超えるものは出ていないのではないかと筆者も大いに参考となった。

(31)

「二〇年代ソ連の価値論争はこれまで多くの場合ルービン＝コーン論争として紹介されてきたむきがあるようであるが、コーンとの論争は論争過程全体の中ではむしろ比較的小さい局面(しかも、ルービン自身はコーンの批判をそれほど重視していたとは思われない)にしかすぎないのであって、二〇年代の論争全体をルービン＝コーン論争と性格づけるならば、事態があまりにも単純化されることになるであろう。」(同上書、「訳者解説」、五一〇頁)

因みに、この論争の発端は、ア・ア・ヴァズネセンスキーとイ・ダシコフスキーのルービン『マルクス価値論概説』に対する批判であつ

(32) (33) (34) (35) (36) (37)

たといえよう。ルービンのイ・ダシコフスキー、エス・シヤブス、ア・コーン、エス・ベンノフの批判に対する反批判は、『マルクス価値論概説』の第四版に収められている。

ダシコフスキー「マルクスの抽象的労働と経済的諸範疇」(ルービンと批判者たち)所収、七四―七五頁)

「抽象的労働はブルジョワ社会の内的構造を形成する諸範疇ではない。概念としての抽象的労働が問題であるかぎりでは、それはすべての時代にかかわるが、しかし、それは歴史的發展の一定の段階においてのみ『事実上真実のもの』になる。このような諸範疇は条件付きの歴史的範疇と呼ぶことができるであろう。」(同上書、六一―六二頁)

「マルクスにおいては労働の二重の本性が問題にされているのに、コーンは具体的・抽象的・社会的という労働の三重の本性を論じなければならぬであろう。」(『マルクス価値論概説』、三三三頁)

例えばダシコフスキーは、ルービン流の試み、つまり「抽象的労働が生理学的意味での労働ではなく、労働力が現実の外的世界の対象ではない」となると、「これらはすべては霊的な『社会化』された抽象概念」ということになってしまい、「すべての理論構成が空中に浮いて」と批判する。「要するにそれは、経済学の対象から生きた素材のあらゆる痕跡を追放しようとし、マルクス主義の理論体系化からその物質的基礎を奪おうとする志向に帰着する」(ルービンと批判者たち、八四頁) ことになってしまっているという。

このような視角からの批判は、ルービン批判者たちにとって共通するものである。

(36)

竹永はこの間の事情に関して次のようにコメントしている。

「周知のように、スターリン独裁体制の確立とともにマルクスの経済理論についての研究は、党のイデオロギーの統制の下で窒息してしまい、ローゼンベルクの『資本論注解』に代表されるような教典化された教条体系のステレオタイプ的解説が国策テキストとして延々再生産され、二〇年代の論争の中で提出された諸問題はネットワーカーのあだ花として葬り去られ、その後ながいあいだ忘却の淵に沈められたままとなった。」(『マルクス価値論概説』、「訳者解説」、五五五頁)

(37)

例えば安部隆一『「価値論」研究』(岩波書店、一九五一年)を参照

されたい。

因みに戦後の〈抽象人間労働〉をめぐる論争に関しては、『資本論体系 二 商品・貨幣』（種瀬茂他編、有斐閣、一九八四年）、『資本論を学ぶ I』（佐藤金三郎他編、有斐閣選書、一九七七年）、『マルクス経済学叢書 一 価値論の新展開』（伊藤誠他編、社会評論社、一九八三年）、『資本論研究入門』（大内秀明他編、東京大学出版会、一九七六年）、『クリティーク 経済学論争』（降旗節雄編、社会評論社、一九九〇年）、『資本論研究 I 商品・貨幣・資本』（宇野弘蔵編、筑摩書房、一九六七年）等を参照した。以下、参考文献を掲げるに留める。

- (38) 例えば石渡貞雄（『労働の抽象的性格』…『経済学雑誌 第十八号』所収、一九四八年）などがそうである。
- (39) 林直道（『価値論にける技術主義の体系』…『経済学評論』、一九五〇年七月号所収）や宮川実（『資本論講義 一』青木書店、一九七四年）等を参照されたい。
- (40) 遊部久蔵『価値論争史』（青木書店、一九四九年）
- (41) 山本二三丸『人間の労働の経済学的考察 (1)』(6)（『立教経済学研究 第十四巻』十六巻）所収、一九六一〜六二年）
- (42) 見田石介『資本論の方法』（弘文堂、一九六三年）
- (43) 吉原泰助『労働の二重性』（宇佐見誠次郎他編『マルクス経済学体系 I』所収、有斐閣、一九六六年）
- (44) 吉原泰助『生産関係分析としての商品論』（吉原泰助他編『講座 資本論の研究 第二巻』所収、青木書店、一九八〇年）
- MEGA, Ab.II, Bd.10, S.167.
- 「われわれがその単純で抽象的な諸契機において叙述してきたような労働過程は、諸使用価値を生産するための合目的活動であり、人間の欲求を満たす自然的なものの取得であり、人間と自然との間における物質代謝の一般的な条件であり、人間生活の永遠の自然的条件であり、それゆえこの生活のどの形態からも独立しており、むしろ人間生活のすべての社会形態に等しく共通なものである。それゆえ、われわれは、労働者を他の労働者たちとの関係において叙述する必要がなかった。一方の側に人間とその労働、他方の側に自然とその素材があれば、それで十分であった。」

(45) 宇野弘蔵『経済原論I』岩波書店（『宇野弘蔵著作集 第一巻』九〇頁）

宇野は別の個所で次のような言い方もしている。

「この労働の二重性は、マルクスによって『商品に表わされた労働の二重性』……として始めて明らかにされたために、商品を生産する労働に特有なるもののように、しばしば誤解されるのであるが決してそうではなく、むしろ反対にあらゆる社会の労働に共通なるものが、商品の生産においては、……特定の使用価値の生産と共に一定量の価値を生産するという、商品生産に特有なる二重性となつてあらわれるのである。」（『経済原論II』岩波書店—『宇野弘蔵著作集 第二巻』—一四〇〜四一頁）

また、次のような言い方もする。「労働の二重性は、商品生産に特有なものではない。」「資本主義にさきだつ諸社会の生産労働でも、社会の基礎をなす普通一般の労働は、抽象的人間労働の一面を明らかにしめしている。」（『経済学演習講座 経済学原論問題II 解答—同上書—二三八—三九頁』）

- (46) 宇野弘蔵『経済原論I』、二〇頁
- (47) 宇野弘蔵『経済原論II』、八六頁
- (48) 宇野弘蔵『経済原論I』、九六頁
- (49) 廣松渉『資本論の哲学』（『廣松渉著作集 第十二巻』岩波書店）、十二頁
- (50) 同『物象化論の構図』（『廣松渉著作集第十三巻』）一六九頁
- (51) 同『資本論を—物象化論を視軸にして—読む』（『廣松渉著作集 第十二巻』）三八四頁
- (52) KI, MEGA, Ab.II, Bd.10, S.73
- (53) ibod. S.72
- (54) 廣松渉『資本論の哲学』、二〇三頁